

J. S. ミルの宗教思想：希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか

HASEGAWA, Etsuhiro / 長谷川, 悦宏

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学文学部紀要 / Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

2008-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003574>

J. S. ミルの宗教思想

—希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか—

長谷川 悦宏

はじめに

J. S. ミル (John Stuart Mill, 1806-73) は十九世紀を代表する功利主義者、実証主義者であるが、その研究において宗教思想は、小泉仰が指摘しているように他分野に比して不活発な状況にあったと言えよう。だが近年レイダー、セル等によって、ミルの宗教思想に関して注目に値する研究がなされた⁽¹⁾。論者は彼らの研究を基本的に評価する者であるが⁽²⁾、ミルの「人間性の宗教 (Religion of Humanity)」といわゆる「希望の神学」⁽³⁾ との関係に関する彼らの判断は、妥当性を欠くものとする。彼らの考察によれば、ミルの宗教思想の基本的立場は人間性の宗教の確立にこそあり、その確立後には希望の神学は消滅するものと見做される⁽⁴⁾。このような主張は明らかに行き過ぎたものであり、希望の神学はそれ独自の価値を持つものとする論者は考える。

本論はこの点を明らかにするために、ミルの人間性の宗教の先行者であり、実証主義の代表的思想家であるコント (Auguste Comte, 1798-1857) の人類教 (Religion de l'Humanité) を取り上げ、両者の比較を試みる⁽⁵⁾。コントとミルの宗教思想の間には明らかな相違が存在する (たとえばコントはパウロこそキリスト教の真の確立者と見做しているがミルはパウロに対して基本的に否定的な評価を与えている)⁽⁶⁾。とはいえミルの長年の友人であった A・ベインが指摘しているように人類教と人間性の宗教との密接な関連性は明白である⁽⁷⁾。十九世紀西欧宗教思想の文脈において、実証主義の宗教と言えば先ずコントの人類教が想起されると言うて良く、両者の比較はミルの人間性の宗教を考察する際必須と考えられる。具体的には同時代人にとって実証主義者の与えた影響とは、神を人類に、靈魂不滅を人類の記憶に替え、道徳において利他主義を唱えた点に求められる⁽⁸⁾。そしてこの枠組みはレイダー等、コントとの関連性を認め、(希望の神学に比し) 人間性の宗教を強調する今日のミルの宗教思想解釈にも、基本的に引き継がれているものと考えられる⁽⁹⁾。論者はこれらの枠組みの内、特に靈魂不滅の問題に希望の神学におけるコントの影響を脱したミルの宗教思想の独自の発展的展開を認める。本稿はレイダー等近年の解釈に抗し、コントの人類教との比較を介して、ミルの宗教思想における発展的展開を彼の靈魂不滅に関する考察の深化の中に見出そうとする試みである。

一、コントの人類教

A. 前期思想における個人の永生の願望

コントの人類教を直接検討する前に、先ずコント実証主義の前期思想を検討する⁽¹⁰⁾。人類教は後期思想において初めて提示されるものであり、たとえ前期から後期へのコント思想の展開に飛躍を認めるとしても、それは多くの点で前期思想を前提としている。そしてこのことは靈魂不滅の問題に関しても基本的に妥当する。もっとも靈魂不滅そのものは通常は科学の領域に属するとは考えられない⁽¹¹⁾。他方コントが標榜する立場、実証主義は、神学、形而上学を退け、諸科学に依拠する思想体系である。従って元来コントの思想体系中には、靈魂不滅はその位置を持ち得ないように思われる。実際前期思想においてはこの判断は基本的に妥当するが、それはコント実証主義が科学主義的立場に立つという理由のみからではない。靈魂不滅の問題に関しては、コントが「現実中存在しているのは」「人類のみである」として個人を「抽象」として退けている点がより重要である（C, VI, 636）。コントは所謂個人を個体と呼び、生物学的レベルに位置づける。個人の死とはこの個体の消滅以上の意味を前期思想においては持ち得ない。従ってそこに死後存続し続ける個人、靈魂不滅という事態は存在し得ないのだが、他方コントは靈魂不滅に対応すると考えられる永生の願望を持つことは退けない。コントによればそれはノーマルな願望なのであり、実証主義においても間接的な形ではあるが充足されるものなのである。

「一人の人間〔個人〕は、こうした社会的拡大によって、自己を永続させたいという傾向の正常な満足を得るであろう。…こうして、種族によってしか自己を永続させることができなくなった個体は、できる限り完全に種族と合体し、現在ばかりでなく、過去や特に未来に及ぶあらゆる集団的存在に深く自分を結びつけることになる。」（D, XI, 75, 二〇六）

前期思想における個人の永生の願望は、各人が生物種としての人類へ合一することによって充足される。コントはこの合一の具体的な手続きに関しては、前期思想では言及していない。だがそれは単に人類へと思いを馳せるといったような、漠然としたものでないことは明らかであるように思われる。コントの思想体系において人類の知の歩みは三段階の法則によって表現される。従って各人が過去、現在、未来に及ぶ「集団的存在に深く自分を結びつける」と言う時、各人がこの法則を理解することは必須の前提と言える⁽¹²⁾。但しそこで語られる「自己」とは、あくまで靈魂不滅を要求しうるような個人ではなく、「抽象」的存在に留まる。前期思想における靈魂不滅の問題は、

- ①厳密にはフィクションであり、
 - ②その願望は（漠然としたものではないが）高度に知的、観念的な手続きにより充足される。
- と考えられる。

B. 人類教における主観的靈魂不滅

人類教においてコントは、ある種のオントロジーへと、即ち人類の実体化、大存在 (le Grand-Être) の確立へと踏み出す。このことによりコントは前期思想の観念的性格を脱した、存在論的な靈魂不滅を獲得する。もっとも人類教の段階においても、コントは実証主義の立場を堅持している。従って一般的な意味での靈魂不滅は、人類教においても存在しない。新たに提示される概念は、主観的靈魂不滅である。

大存在とは人類進歩の歩みへと参与するあらゆる諸存在からなる一つの巨大な複合的存在であり、人類教における礼拝の対象である。この複合的存在の構成要素は主として人間、前期思想においては退けられた個人である。人類教において新たに導入されるこの個人は、生前と死後とによって二つの性格を異にする存在、客観的存在=生者と、主観的存在=死者とに分類される。後者は「あらゆる物理的法則から逃れ、人類の基本的発達を直接決定するより上位の諸法則〔三段階の法則〕にのみ従属する」(S, VIII, 61) 存在であり、その器官として大存在と合一し、永遠に預かることが可能な存在である。もっとも主観的存在は死者である以上直接大存在に仕えることは出来ず、生前の業績、後世への遺産が生者によって活用されるという形で大存在に仕える。また全ての死者、全ての業績が評価されるのではなく、各人の生前の業績は一定の観点から評価される。各人の大存在への合一は、「より上位の諸法則」の下、その評価が定まって初めて成就するのである。このことはまた主観的存在の性格の反映でもある。コントは、生者は「意志 (la volonté)」によって、死者は「定め (la fatalité)」によって性格づけられるとする (S, X, 36-7)。人は生ある間は「身体的必然性に固有の逸脱」を免れることは出来ない (S, X, 36)。生者は意志を持ち、可能性へと開かれている故に不安定な存在である。ただ死者のみが、その確定性によって人類を代表することが出来、永遠に与ることとなる。人類教における生者から死者への移行、それはある種の転生と言いうような根本的な変化を個人の性格に対して与える。

「人は生きている間は存在 (être) として、その個人的死の後には器官 (organe) として奉仕する。個人の死によってその客観的生 (sa vie objective) は一つの主観的生 (une vie subjective) へと変換される。」(S, VIII, 61)

以上から人類教における靈魂不滅の特徴は、

- ①靈魂不滅は主観的な意味でのみ成立し、死後各人が大存在へと合一することにより成就する。
- ②この合一は存在論的レベルの事態である (単なる観念上のものではない)。
- ③その際各人の生前の業績が、一定の観点から評価、決定されねばならない。死者の永遠性はその確定的性格に依拠する。

と考えられる。これらの特徴の内②は明らかに前期思想の立場と対立し、かつそれは一般に疑問視されると思われる。というのも生前の業績を介するという死者の在り様は、コントの主張にもかかわらず、

観念的色彩を帯びているように見えるからである。実際ミルは彼の人間性の宗教において、コントの死者理解を拒絶しているのである。

二、ミルの人間性の宗教

A. 「死者の支配」への批判

人類教は既に触れたように人間性の宗教の先行者と考えられるが、他方ミルがコントの後期思想に対して批判的であったことも彼の『コントと実証主義』第二部の記述から明らかである。ミルの批判には様々な側面が認められるが、主要な批判はコントの過度の体系化への執着とそれに密接に関係する権威主義とに対して向けられている⁽⁴³⁾。そして人類教における靈魂不滅の問題も、コントのそうした思想傾向の具体的な事例の一つとミルは見做している。

前節で述べたように人類教における靈魂不滅は大存在との合一によって成立するのだが、その基本的性格へのミルの言及は、概ね妥当なものである。即ち大存在は i) 信仰の対象として有神論、キリスト教における神に替わるものであり、ii) それは過去・現在・未来に及ぶ全人類を指し、iii) 更には協力的、友好的な他の生物もその中に含まれるが、iv) 他方評価に値しない者及び業績はそこから排除される。以上の大存在解釈は、(あくまで大枠においてではあるが) ミルが人類教を理解し、肯定的評価を与えていることを示しているものと言えよう。しかし大存在の主たる構成要素である死者に関して、ミルはコントのように現に存在し続けるものとして死者を捉えることを拒絶する。

「そして死は客観的存在から主観的存在への移行—われわれの同胞の追憶のうちで生き続けることへの移行と考えられている。コント氏の宗教はわれわれに対して、客観的存在として永遠たることを約束するものではない。しかしそれは、主観的な永劫不滅—すなわちもしわれわれが人々の追憶に値する何事かを成し遂げたのであれば、広汎な人々の憶い出と死後の礼讃のうちに生き続けるという希望を抱かせることによって、永遠ということに関して、それがなしうるすべてを提供するものである。」(CP, 342-3, 一五八—九)

ミルは死者が持つ永久性をあくまで観念上の事態と見做す。生者が死者の制約下に置かれるというコントの主張、「死者の支配」は、ミルの目には「奇妙なもの」と映る。それが意味することは本来、文明の発展に従って「われわれの物質的精神的所有物の総計」がますます「祖先に負う」という自然な事態を指し示しているにすぎない。ところがコントはその意味を「前の世代の権威」への、つまり伝統的権威への無批判の服従へと転化してしまっている (CP, 357, 一八五)。ミルは「死者の支配」の中にコントの後期思想の最大の欠点、権威主義の悪弊を見出す。更にこのような批判に加え、「死者の支配」の背景をなす死者の「定め」という性格もまた、ミルの自由な批判的議論を重視するという基本的な思想的立場と対立するものと考えられる。神の位置に大存在(人類)を置くこと及びその基本的性格とを、人

間性の宗教は人類教から引き継ぐことが出来よう。だが靈魂不滅の対象たる死者に関しては、ミルは自身の思想的立場を反映した形で、独自にその性格を定める必要があると考えられる。

B. 『宗教の功利性』における靈魂不滅

『宗教の功利性』においてミルは人間性の宗教を提示する。そこでは人類教における大存在は優れた先人たちという形で現れる。人間性の宗教は彼らへの信仰という形で提示され、その提示の前後において靈魂不滅の問題は繰り返し論じられる。

ミルによれば宗教の起源は人知の狭小とその無際限な欲求とのギャップにある。人々はこのギャップを感情と想像力とを用いることで補おうとするのだが、その際宗教は「我々の世界ではない何か他の世界」、即ち死後生を導入する (UR, 419)。従来の宗教 (主としてキリスト教) は靈魂不滅を死後生の想定によって提示するのだが、それはこの世界 (現世) では得難いもの、高尚な感情や慰めを人々に齎すという効用を持つ。しかしながらそのような効用は、ミルの考えでは「地上の生の理想化」によっても獲得可能である (UR, 420)。たとえ各人の現実の生が短く、儂いものにすぎないとしても、我々はこの世の悲惨に対する慰めや善美なるものを得る為に、必ずしも超自然に訴える必要はない。

「…だが人生の短さ故に、人は今生を越えた何かを求めるとするのは、正しい結論ではない。普通の人間は生きている間に見ることもない事柄に深い、最深の関心を持つことなど出来ないという仮定は、人間本性についての誤っていると同時に卑しい見解である。個人の生が短いとしても、人類の生は短いことを思い出してみよ。その無限の存続は事実上永久と等価である。無限の改良可能性と結びつくことで、これは壮大な志への理に適った欲求を満たすに足る対象を想像力と共感に対して与える。」 (ibid.)

ミルはコントの前期思想同様、生物学上の種としての人類を靈魂不滅に替わるものとする。但しミルは神秘的なものに関しては基本的に不可知論の立場に立つ。従って彼には、たとえそれが科学の時代においてどれ程信じ難いものであろうとも、従来の意味での靈魂不滅を完全に否定することは出来ない。しかも超自然の宗教が各人の永遠の願望を充足し得ることが認められる以上、靈魂不滅に関してミルは何らかの形で人間性の宗教の優位を示す必要がある。彼がその優位の根拠として最終的に訴えるのは、利他主義への傾向という道徳的効用である。ミルの考えでは、従来の靈魂不滅には自身の来世における救済のみを願うという利己主義の欠陥が含まれている。それに対し人間性の宗教は、優れた先人への畏敬の念、人類への合一により、各人を自然に利他主義へと向かはしめ得る。但しそれは人類教とは異なり、個人の立場を捨てるような全体との合一の推奨ではない。ミルは社会と個人とは各々固有の領域を持つことを主張し、全体への奉仕のみに偏ることを戒める。キリスト教の靈魂不滅に対しては利他性という道徳的効用を掲げ、人類教に対しては全体主義への危険を警告することで、ミルは靈魂不滅の問題に関してバランスの取れた立場を提示しているように思われる。

だが以上の立場は、結局コントの前期思想の弱められた主張にすぎないのではないのか。それは基本的に観念的でありながら、他方『論理学体系』第六巻に明らかなように、方法論的個人主義を採用している。そこには人類教におけるような人類の実体性の概念は存在しない。ミルも個人の生成消滅を超えるものとして考え得る、進歩する存在としての人類へ言及はしている。だが彼の思想上の立場、自由な批判的な議論を重視する可謬主義的姿勢は、人類の歴史に関するかなり幅広い多様な解釈を許す余地を認めていると考えられる。その場合靈魂不滅は、人類という観点からは、その存在の確かな根拠を得ることは出来ないだろう。実際ミルは靈魂不滅の実質的否定と受け取れる主張を、『宗教の功利性』末尾の「寂滅」への言及において提示している。

C. 存在の停止と再会への希望

ミルはそこで死に関して存在論的レベルへ言及する。懐疑論の立場に立つミルにとって、死によって我々の存在に関して何が生じるかは不可知の事柄である。死は「単なる存在の停止 (The mere cessation of existence)」にすぎず、我々にはそれ以上のことは知りえない (UR, 427)。だがその場合も、ミルによればその功利上の帰結は明白である。我々はそれについて何も知りえないのだから、死に関しては思い煩う必要などない。更にこうした主張を補強するものとしてミルは、仏教の「寂滅 (annihilation)」を援用する (*ibid.*)⁽⁴⁴⁾。通常、人は「意識的な、個別的な存在の停止」、自身の消滅、死に対し恐れおののく。だが仏教においてはそれを幸福としていることを指摘することによって、ミルは少なくともそうした恐れが人間本性に根ざすものでないと主張する。結局ミルは存在論的レベルに基づく靈魂不滅を暗に退けていると言えよう。

以上『宗教の功利性』に見られる靈魂不滅に関するミルの立場は、

① (コントの前期思想同様) 生物種としての人類に靈魂不滅の代替物は見出される。

ア. 但し (人類教とは異なり) それは主観的・観念的なものであって、客観的・存在論的レベルでは否定される。

イ. もっとも従来の靈魂不滅は完全に否定されてはいない (出来ない)。

② 人類との合一において全体主義は避けられ、個人の領域が認められる。また人類史の解釈においても自由な議論の余地が認められる。

と性格づけられよう。

以上の靈魂不滅はミルの経験論的立場に合致するものと言えようが、自身の消滅という深刻な事態を軽視してはいないだろうか。マッツは我々が「永遠の意識的存在」について知り得ない以上「存在停止」は「より安全」な選択であり、従って「一種のパスカルの賭」としてミルの立場は合理化可能と解釈する⁽⁴⁵⁾。だがたとえ危険な賭であるとしても、多くの人は永生に賭けるのではないか⁽⁴⁶⁾。「死後生を不可知論の立場から退ける人ですら、死後、彼が愛した人々と再会するという希望は生き残る」(*ibid.*)と述べる時、ミルもまた靈魂不滅を完全に退けることの困難を理解していたと思われる。このような主張は、何らかの形で死者の存在が認められる場合にのみ、有意味であり得るであろうから。

三、『有神論』における靈魂不滅

『有神論』は神的存在を（証明は出来ないが）希望することは出来るという、ミルが従来の自身の立場を大きく転換した論文として知られている⁽¹⁷⁾。そしてこの転換に伴い、靈魂不滅に関してもミルは希望する余地を認める立場へと変化を見せる。但し靈魂不滅の問題は、神的存在の問題に従属するだけの二次的問題ではない。確かに神的存在の可能性の承認は重大な問題であり、それは靈魂不滅の可能性の前提ですらある。だが神的存在の可能性に関しては、先行二論文においても完全に退けられてはいない。またその性格に関しても特に変化は認められない⁽¹⁸⁾。他方靈魂不滅の問題は、『有神論』においてその面目を一新していると言える。ミルはそこで死後生は、過去および現在の生となんら変わらないという、連続的・同質的の死後生を展開する。もちろん「我々の存在様式」(T, 467)、即ち肉体的、物質的側面に関しては修正を被ることになると考えられるのだが、「死の事実によっては精神的生の上に如何なる突然の断絶も生じないだろう」(T, 466-7)。それどころか「我々の思考原理が持つ諸々の法則」(T, 466)は死後も存続するとミルは主張する。死後もまた生前同様に我々は「我々の努力による改善可能性」(T, 466)を持つのである。修正されたミルの靈魂不滅は、

①実体として各人の魂は死後も存続することを希望しうる。

②死後生は現世と精神面において連続的・同質的と考えられ、現世同様に改善可能性が存在する。

と性格づけられる。もっとも以上の靈魂不滅の肯定は、超自然への志向を促すものではない。『有神論』においても『宗教の功利性』末尾と同様に我々が働きかけることが出来るかどうかという観点から、ミルは死に対する我々が取るべき態度について「私たちが死なねばならないという確信を、保持している必要はない」とする(T, 484, 三三一)。とはいえもはやミルは死後生を「重荷」(UR, 428)と考える『宗教の功利性』末尾の立場には立っていない。死後生への希望が「人間の生の無意味さの感覚」「『価値がない』という大変な苦痛をもたらす感情」を抑えるとミルは主張する(T, 485, 三三三)。このような死に対するミルの態度変更は何に由来するのであろうか。既に指摘したようにこの転換を神的存在の可能性の是認にのみ求めることは困難である。それは恐らく②によって、(ミルの考える)従来の死後生に替わる新たな死後生の構想が可能となったことによると思われる。仮に死後も我々が存在し続けるとして、キリスト教の靈魂不滅は死後の我々に対してどのような効用を持ちうるだろうか。現世の報いしか存在しないならば、我々はそこで何ら成すところがないのではないか。たとえ死後の救済が約束されているとしても、そこに改善の余地がないならば、利己的動機を除けば死後自身が存続することに魅力は無いものと思われる。以上から先の①、②に加え、

③実在的な靈魂不滅への言及は超自然への志向を促すものではない。

④それは自由な個人の自助努力に基づき、利他性と不確定性をその性格として持つ。

が新たな靈魂不滅の特徴として挙げられる。かくしてミルは『有神論』において、彼の基本的な思想的立場と親和的と考えられる、独自の靈魂不滅の概念に到達したと考えられよう。

結 論

最後に再度コントとミルの靈魂不滅を比較することで、ミルが希望の宗教へと向かう内的理由を指摘しておきたい。コントとミルは、ともに生物種としての人類から出発しながら、各々独自の科学の時代における靈魂不滅を提示するに至っている。だが二人の間にはずれが存在する。コントは生物種としての人類から出発し、それを超えるものとしての大存在に、死者の存在根拠を見出している。一方ミルは人間性の宗教においてこの大存在を受容しながらも、その存在根拠に関しては（人類進歩に触れてはいるものの）生物種としての人類に訴えている。その結果、それは死者のための固有の領域を欠き、人間性の宗教の靈魂不滅は利他的な生を送るための実質を欠いた概念装置のようなものとなっている。恐らくそれによって充実した生を生き抜くことが可能な者は、よほど強靱な精神の持ち主か、自らの死を「慰め」と受け取りうる死生観の持ち主くらいであろう。とはいえコントのように主観性に死者の領域を求めることは、経験論の立場に立つミルには到底容認出来ないことである。人間性の宗教の靈魂不滅にその内実を与えるには、経験の吟味に耐え得る死者の領域が必要である。蓋然性に基づく希望とはまさにこのような領域と考えられるのだが、それはその地位と性格を異にするとはいえ、キリスト教の靈魂不滅に近接した領域と言えよう⁽¹⁹⁾。だが科学の時代においてもなお我々が永遠への願望を捨てきれず、それに真に答えようとするならば、実質を伴った靈魂不滅が求められるのであり、人間性の宗教は希望の神学を待って初めてその十全な形態をなしたと言えよう。

注

* ミルの著作は *Collected Works of John Stuart Mill*, Toronto U.P., 33vols, 1963-91 により, *CW* で示す。『コントと実証主義』、『自然』、『宗教の功利性』、『有神論』は以下の略記号を用いる。なお『コントと実証主義』に関しては村井久二訳（木鐸社、一九七八年）に、『有神論』に関しては小泉の抄訳（『有神論』、『ミルの世界』、講談社学術文庫、一九八三年）に従った（訳出されていない箇所に関しては拙訳）。（略記号、原文の頁数、翻訳の頁数）と表記する。

CP : *Comte and Positivism* (London: Trubner, 1865), *CW*, vol. X.

N : *Nature*.

UR : *Utility of Religion*.

T : *Theism*.

Three Essays on Religion (London: Green, Render, and Dyer, 1874), *CW*, vol. X.

** コントの著作は *Oeuvres d'Auguste Comte*, Éditions Anthropos, 12 tomes, 1968-70 により, ローマ数字によって巻数を, アラビア数字によって頁数を示す。『実証哲学講義』と『実証政治学体系』、『実証精神論』は以下の略記号を用いる。なお『実証精神論』に関しては霧生和夫訳（『実証精神論』, 責任編集清水幾太郎『コント スペンサー』, 中央公論社, 1980）に従った。（略記号, 巻数, 頁数, 翻訳の頁数）と表記する。

C : *Cours de Philosophie positive*, 6 tomes.

S : *Système de politique positive ou Traité de sociologie*, 4 tomes.

D : *Discours sur l'éspirit positif*.

*** 引用文中の [] 内は, 論者による注である。

- (1) 小泉はミルの論証が科学に基づくが故に今日時代遅れになった点と, それが実践性を含む故に今日のメタ言語学的な宗教論においてミルの宗教論が論じられなくなった点とを指摘している。小泉仰『J・S・ミルの神

存在証明論批判の検討』(杉原四郎・山下重一・小泉仰責任編集『J・S・ミル研究』, 御茶の水書房, 1992, 第九章) 参照。しかし近年, Alan P.F.Sell, *Mill on God*, 2004. Linda C.Reader, *John Stuart Mill and the Religion of Humanity*, University of Missouri Press, 2002. Alan Millar, 'Mill on religion' in J.Skorupski, *The Cambridge Companion to Mill*, Cambridge : CUP, 1998, p.176-202.など, ミルの宗教思想研究は活況を呈しつつある。本邦における近年の研究状況に関しては, 有江大介『J・S・ミルの宗教論—自然・人類教・“希望の宗教”—』(横浜国際社会科学研究所第12巻第6号, 横浜国立大学国際社会科学学会, 2008) 三三頁参照。

- (2) レイダー, セルらの研究は思想史的アプローチを重視することで, 言語分析的アプローチでは困難な広い視点からミルを評価するという特徴がある。論者は些かテクニカルになりすぎた嫌いのある今日のミル研究に新たな光を当てるものとして, 彼らの研究を基本的に評価する。
- (3) 希望の神学はミルの用語ではない。カール・ブリトンにカントを思わせる「単なる希望の領域での宗教」という表現を用いている (Karl W.Britton, 'John Stuart Mill on Christianity', *James and John Stuart Mill, Papers of the Centenary Conference*, Edited by J.M.Robson and M.Laine, Univ.Tronto Press., 1976. p.23., カール・ブリトン「ジョン・ステュアート・ミルとキリスト教」(柏経學訊, J・M・ロブソン, M・レーン編, 杉原四郎他訳『ミル記念論集』, 木鐸社, 1979, 四七頁))。(両者の比較が大変興味深いテーマであることは論者も認めるが) ミルは『有神論』においてカントを批判しており (T, 445-6, 三一七—一八), また一般に定着しているとも言い難いことから本論ではこれを用いない。有賀は「希望の宗教」と呼ぶ方が相応しいと主張している (前掲『J・S・ミルの宗教論—自然・人類教・“希望の宗教”—』, 注 (51), 三〇頁)。論者もこの呼称を用いたことがある (「希望の宗教は人類教に何を付け加えたのか」, 日本イギリス哲学学会関東部会第77回研究例会, 於法政大学, 2006)。いかなる呼称が『有神論』におけるミルの立場に相応しいかは未決の問題と言えようが, 主として小泉仰のミル研究を介して希望の神学という呼称は一応定着しているものと思われる。本論でもこれを用いる。
- (4) レイダーは人類教の確立とともに希望の宗教は消えると考えている (Linda C.Reader, *op.cit.*, p.232.)。
- (5) コントの人類教へのミルの評価と両者の関連性に関しては, 拙論『人類教の二つの解釈』(社会思想史学会編, 『社会思想史研究No.29』, 藤原書店, 2005) 注 (1), 一一六—一七頁, Charles D.Cashdollar, *The transformation of Theology, 1830-1890*, Princeton Univ.Press.,1989, p.160-1.参照。
- (6) 『有神論』においてミルは奇跡の問題に関連して, カトリックのドグマティックな態度を批判している (T, 480)。(イエスは高く評価するが) 概して伝統的なキリスト教 (勿論パウロはその祖である) に対してミルは批判的である。Cf.Joseph Hamburger, *John Stuart Mill on liberty and control*, Princeton Univ.Press.,1999, p.100-101.
- (7) 「彼 [ミル] はここで 『宗教の功利性』, 人々相互の好意的感情の基礎の上に作られる一種の人類宗教を主張した。この点について完全にしたのは彼自身であるが, 私は, 彼が最初コントによって先導されたことを疑わない」(A.Bain, *John Stuart Mill, A Criticism with Personal Recollections*, 1882 (Reprinted by M.Kelley, 1969) , p.139., A・ベイン『J・S・ミル評伝』(山下重一・矢島杜夫訳, 御茶の水書房, 1993) 一六〇頁)。
- (8) Cf.Charles D.Cashdollar, *op.cit.*, p.307.
- (9) 但し靈魂不滅に関しては『有神論』の存在が事態を複雑にしている。セルは『有神論』における靈魂不滅はハリエットの死によるもので, ミルの哲学的諸前提と合致しないとする (Sell, *op.cit.*, p.148.)。レイダーは『有神論』の靈魂不滅に譲歩を認めつつも, ミルの人間的, 現世的, 社会的宗教という立場に変更はなかったとする (Linda.C Reader, *op.cit.*, p.210.)。いずれにせよ『有神論』の靈魂不滅は, 積極的な評価を与えられているとは言い難い。
- (10) コント実証主義の前期から後期への歩みに関しては, 安孫子信「コント, オーギュスト」(編集委員 小林道夫・小林康夫・坂部恵・松永澄夫『フランス哲学・思想辞典』, 弘文堂, 1999) 二三七頁参照。
- (11) 但し十九世紀において心霊の科学的研究は, 一面において多くの知識人の関心を集めていた。心霊科学と実証主義の関係に関しては, 稲垣直樹『フランス〈心霊科学〉考』(人文書院, 2007) 参照。
- (12) 三段階の法則と人類への参加の関係に関しては, 安孫子信, 前掲書二四二—三頁参照。コントは後にデュルケム等へと続く社会実在論の系譜に連なり, 単なる生物種を超える人類という視点は前期思想においても存在する。しかし永生の問題に関する限り, 前期思想においては生物種としての人類を超えたものへの言及は見られない。

- (13) 前掲拙論一〇八—一〇頁参照。個人に対して強すぎる社会的或いは宗教的権威という同様の人類教に対する批判、危惧は、主著『自由論』第一章、『功利主義論』第三章にも見られ、ミルの一貫した主張と言える (*On Liberty, CW, vol X VIII, p.227., Utilitarianism, CW, vol X, p.232.*)。
- (14) ミルの宗教思想と仏教との関係に関しては、矢島杜夫『ミルの『自由論』とロマン主義』(御茶の水書房, 2006) IV ミルの認識論・宗教論第三章「人間の宗教」と仏教を参照。矢島によればミルの立場はあくまで現実的、経験的世界に留まるものである。またそこに仏教との近さが認められる。但し矢島の主張は人間性の宗教に関するものであり、『有神論』への言及はない。横山は同書を挙げ人間性の宗教と仏教との比較の重要性を指摘する一方、『有神論』におけるミルの立場を懐疑主義とし、その自然神学的議論に一定の評価を与えている(横山輝雄「Ⅶ ミル／スペンサー」, 責任編集伊藤邦武『哲学の歴史第8巻 社会の哲学【18-20世紀】』, 中央公論社, 2007, 四二〇—三頁)。論者もまた人間性の宗教と仏教との比較の重要性を認め、かつ『有神論』におけるミルの主張を評価する者である。但し後者に関しては、論者は自然神学的議論より以上に、靈魂不滅論を重視する。
- (15) Lou Matz, 'The Utility of Religious Illusion : A Critique of J.S.Mill's Religion of Humanity' ,*Utilitas* , Vol.12, No.2, p.145.
- (16) 三木清は、死に関して「死は慰めとしてさえ感じられることは可能」と述べ、パスカルの立場、死の過大視を批判している。だがその三木をしてなお、死別者との再会への希望、賭けは退けられない(三木清『人生論ノート』「死について」(『三木清全集 第一巻』, 岩波書店, 1966) 一九六—九頁)。
- (17) 柏經學『ミルの宗教三論』(杉原四郎・山下重一・小泉仰責任編集『J・S・ミル研究』, 御茶の水書房, 1992) 一八六—八頁参照。
- (18) 前掲拙論一〇七頁参照。ミルは『有神論』において神の道徳的属性に関しては、『自然』に付け加えることはない(*T*, 456)。但し『自然』においてはそれ自身として或いは事実との矛盾のみが問題とされていたが(*N*, 389), 『有神論』では新たに推断を立証する証拠が問題とされる(*T*, 456)。しかしそこから神に関する新たな属性が引き出されてはいない(*T*, 458)。
- (19) カール・ブリトンによれば、1826年の精神の危機以後ミルの中に「人間の意図によって達成されなければならない実践的目的への献身より以上の何かあるものについての観念が」生じた(Karl W.Britton,*op.cit.*, p.22., 前掲書四五頁)。但しミルは結局経験論的立場に立ち形而上学的命題を受け入れなかったため、ミルの宗教論は不十分な立場に留まったとブリトンは解釈する(Karl W.Britton,*op.cit.*, p.32-4, 前掲書六四—八頁)。論者はミルが単純な功利的観点のみに留まらなかったとする点で彼に同意するが、ミルが希望に留まった点はむしろ評価すべきであると考ええる。

The religious thought of J.S. Mill:
What did the Theology of Hope add to the Religion of Humanity?

HASEGAWA Etsuhiro

The idea has been generally accepted that Positivism in the Nineteenth Century has shifted the immortality of an individual to the memory of the human race. In fact, Auguste Comte, in his earlier thought, insisted that our tendency to the eternity is satisfied by the human as a biological species. However, in his Religion of Humanity, he proposes the individual immortality, that is to say, the subjective immortality which is achieved by our incorporation with the Great Being and whose state of affairs is called ontological. While accepting the Great Being in general, J.S. Mill appeals to the concept of mankind concerning the problem of the immortality, because he regards the individual immortality by Comte as having a character of mere idea. As a result, he rejects the individual immortality virtually, but never gives up the idea of the hope of our reunion with the dead after earthly life. In the end, J.S. Mill admits the possibility of a kind of the immortality and proposes his own concept of that. This new concept, which is characterized by two features, continuity and homogeneity between a present and future life in our spiritual life, is in accord with his empiricist position. This concept giving the dead its proper region, the Theology of Hope has something to add to his Religion of Humanity.